

THE USUAL P&G STORY

Ferdinando Frega — Nando the Scribe



いつものP&Gの話

いつもの話だ。男たち。支度ができていない。まとまりがない。「女がひとり来る」とは文字どおりそれだけのことだと — それ以上の何でもない、思い込んでいる。

電報は明快だった。女がひとり。天使ではない。ジュリアナではない。Gilletteではない。

彼らは何もかも用意していた。食べ物。飲み物。フィリピン人の料理人まで。だが、自分自身を用意した者はいなかった。女が入ってくるときに大事な、ただひとつのことを、誰も考えていなかった。その部屋にふさわしい者であること。

彼女が入ってくる。穏やかな微笑み。確かな足どり。

「みなさん、こんにちは。ジュリアナです。ポルトガル人です。7月1日付でこちらに移ってきます。始める前に、同僚のみなさんにお会いしておきたくて — それから、この先に何が待っているのかを知っておきたくて」

沈黙。男たちは、日食を見るように彼女を見る — 見てはいけないと知りながら、やめられずに。

「失礼ですが — みなさんはどちらの部署の方ですか」

「広告代理店の取りまとめをしています。スローガンに金を払います。アイデアを持ってきます」

「どこの会社から？」

沈黙。誰も答えない。

部屋でいちばん声の大きい男が — いつだっていちばん声の大きい男だ — 身乗り出す。

「で、あんたは？ どこの部署に配属されたんだ？」

彼女は微笑む。

「私の部署はいちばん上です。キャンプおじいさんのすぐ隣。J氏の近くです」

「会社の...霊的な部門にいるのか？」

「ある意味では。でも修道女ではありません。説教は彼女たちと同じようにします — ただ、何十億という単位でやるだけです」

男たちは目を見交わす。誰かがささやく。

「あんた、いったい何者だ？」

彼女は火に近づく。本物を見るときの目で、それを見つめる。それから振り向く。

「私はGilletteの新しいCEOです。130年を経て。そして明日の朝、みなさんには、よろしければ、ひげをきれいに剃って出社していただきます。イメージはビジネスの一部です。そして今日...Gilletteは女です」

書記ナンド